

安西冬衛全集

第七卷

安西冬衛全集

第七卷

宝文館出版

安西冬衛全集 第七卷

昭和五十四年十二月二十日 第一刷發行

著 者 安 西 冬 衛

編 者 山 田 野 理 夫

發行者 羽 生 和 男

發行所 寶文館出版株式會社

東京都千代田區神田神保町三ノ一七
郵便番號一〇一

振替東京五一二八〇

電話〇三(二六二) 四四〇九

印刷所 中臺整版
製本所 大光堂

©1979 Misaho Anzai

Printed in Japan

0395—001198—7715

目次

日記一

昭和三年（一九二八）		5
昭和四年（一九二九）		13
昭和六年（一九三一）		23
昭和七年（一九三二）		43
昭和八年（一九三三）		66
昭和九年（一九三四）		97
昭和十年（一九三五）		111
昭和十一年（一九三六）		118

昭和十二年（一九三七）		120
昭和十三年（一九三八）		136
昭和十四年（一九三九）		156
昭和十五年（一九四〇）		161
昭和十六年（一九四一）		191
昭和十七年（一九四二）		207
昭和十八年（一九四三）		239
昭和十九年（一九四四）		315

後記

409

装釘 濱田濱雄

日記一

昭和三年（一九二八）—昭和十九年（一九四四）

昭和三年（一九二八）

島田道隆

大連市水仙町二十八番地へ移転致しました
（第二中学校運動場のすぐ裏です）

誤植ニアラズ

どうやら、狐のやうだ。

七月二十二日

○スローガンといふ言葉は移民の見せ金に似てゐる。

○猫の横顔はうむぎのやうだ

○針葉樹型と瀾葉樹型。

○箱ノゴトヤ^{ツヤ}仲

5.28

落葉松と石^{まはら}柏

落葉松の中に私は石^{まはら}柏を育てよう

彼女（彼女つてアスバラガスですよ）の柔い床に、私が薬を
施^しいてやらないさきに針が

再考ヲ要ス

彼女がどんなに麗はしくみえるでせう。

9.28



○薔苔類に似た顔

○ホタルのやうな婦

○ノールエイ首府 オスロ（旧称クリスチャニヤ）

○東プロシヤ首府 ボズナニ（旧、ボーゼン）

朱冬

六月七日

○西洋紙にはシワがあつた。それが馬に見え又バラにみえ。

玄い土が虚空に鶴を撒く

遠眼鏡の中に仕掛であるオルゴオル私のよ

昔嘗^なつた大きい銅貨 味噌色の貨幣よ

六月九日

○彼女の裾にはバラがあつた。

六月九日

○棚に心ありや 曰ク掌

無に生ありや 曰ク無精

六月九日

○客間の棕櫚の鉢の側にセラニウムが紅。それが夾竹桃のやうに見えた。

○桐の木のシルエットのことを話した（八日夕ぐれ馬車で）

○乞食のトラスト／＼ モスコ 組成人員約150人—総裁
(七月十九日 大毎)



勞農ロシヤ旗章

○二人のヴァン・ドンゲン

犬／＼ 画家
北極探險家

秋

はのぼのと木芙蓉が咲いた。私は地球の重量グラビティを掌に感じた。

七月二十三日

冬

桜の枝に曙貝殻ササガがのほり結ふ 舌よりもかるい空氣の抵抗よ

七月二十三日

同じく

十方を桜の杖が微塵ミクロに割く 針よりもきびしい空氣の抵抗よ
八月二十日(月)日光秋氣を含む

美佐保、満鉄産婦人科ニ診察を受けに行く。往復人力車。

八月二十一日(火)

寢間着の上に羽織を重ねる。それをみせにくる「をかしい恰

好」

犬のバタバタ耳を揮る音。

洗面器の三和土を滑る音。蠅が二匹。みえてゐる寢間。

夜雷雨。真夜中停電。

八月二十二日(水)雨のち晴

藤井より「児童生活」来ル「満鮮のぞき」

午後滝口来ル。×××××。早クカヘツタ。索然。

夕食西洋料理。

婦女界九月号来ル。

坡暖冬生笋

松涼夏健人

藤華。藤子落ち。

浅葱色の空。中空は白い雲。杏の葉漸粗。ハネツルベ。

八月二十五日(土)曇

朝棚雲。朝ノ寢床カラ美佐保トミル。キミキミの雲の様だと
いふ。

なにを思つたかロングハウスの山ノ神オヂキをした。夕景父
来ル。病狀聴取報告。美佐保検尿異狀ナシ。

八月二十六日(日)秋雨蕭々

朝顔二つ雑草の中に咲く。紫紺と空色。カンナズシ。猫終日
陋居。文芸春秋九月号を購ふ。

昭和亭の岡持レンコートで濡れてくる。カニの三杯酢。

宵、美佐保家のこと妹のことを思ふて泣く。彼は臥ながら紀念帖をみてゐる。そして卒業の歌を歌つてゐる。その涙の中に過去はオーロラのように。

○少くともインキほど清浄なものはない。けれども壁などをよごしたインキほど又不浄なものもない。九月二十六日夜灯火澄む。雨の音激し。雨の中でイトドが啼く。久しぶりで日記を書く。彼は涙を洗ひにいつて今お茶を淹れてゐる。寂しさを追払ふのだ。

○室生犀星の「詩壇の現在」甚だ低能なり。コンベンションナリーを一步も出でず。彼の小説(今月号ノ「幾代の場合」)又好んで苦淡を弄す。芥川のモーホー。洵に悪作也。不愉快。猫いつのまに出了たのやらズブぬれになつて帰つてくる。重さ一貫目。

堺へ手紙を出す。明日入れるのだ。

○広告

一茶の俳句と其一生

文学士 横山青蛾氏著

、一茶を知らずして俳句を語るな

妻の寝顔を謙譲な美しさがある。



トユの音をきいて私は寢床に腹這つてゐる——一本の真に火をくべて。時計は十二時に近く。

秋雨の中に虫がないてゐる。

パンのかけらをひろいに、打たれた蠅が歩いてくる。彼はジヤムの滴りにありつく。そして甘いその汁に黒い舌を杖のやうにおろしてゐる。彼は眠らないのか？
今夜は眠むるのが惜しい。

舌といふ字よりもつと弾力的な形態をもつたものを感じさせられる。

○寝顔

1 イヤイヤといふ表情

2 それから顔をシカメル

3 最後ニ微笑……

こいつを発掘してやらうか。

八月二十七日(月) 秋曇

西片窓だけあける。なほ浴衣。

朝食卵三つ。フワフワ。郵便なし。牛乳もなし。

夜明に猫を出した。

昼食、さしみ、魚の子、唐辛の煮付。

夕景、父来ル。十時使葉持参。夜十一時ネムル。

八月二十八日(火) 秋曇 妻病臥

鏡台を旧の如くする。障子をたてる。掃除落ついた。

ハガキを二枚書く。(藤井と幸子。)

寂しい日だ。ニワトリもなかない。薄暮、雨到ル。霧ノ如シ。秋雨。大連新聞ヲ新キトルコトニスル。

八月二十九日(水) 晴 中元

パンテオン・ロセツチ号・映画往来(北川より)来る。

風呂場の掃除をする。

台所の戸口に椅子を出して門の風景を見る。

草の山のアウトラインに日が燦し金。小児の生毛ウケの様に。

一群の小鳥光りながら過ぎる。街道の上。上の道と高度同じだ。

美佐保ノ為ニダリヤ黄と朱、二つとる。水瓶に入れる。

○支那の行列

桜飯をたく。ロールキャベツを作る。妻病中ではじめての料理。うまし。病気はかどらず猛烈に淋しがる。

夜父上来ル。一泊(中元のお萩)月明良夜。父商工会議所の常議員に重任。蚊取線香を買ひに使をやる。葡萄をやる。

八月三十日(木) 晴 気温上昇

横デ臥ナガラ余ガコレカクヲミテ妻ハコノトキ顔ヲミテ笑ツテ手デ自分ノ目ヲフタシタ。微笑スベシ。

今ハ歌を唄つてゐる。(夜十時十分)

美佐保ハ今日、泣イタ。猛烈ナ淋シサ。病氣、望郷、猫、

「Good Day」 溝、其他、寝ルト夢ヲミル。

今夜電車、自動車無暗ニ通ル、今夜モ月明。

北川ニハガキ。映画往来ノ礼返事。

カニ草ノ手入。

クサミヲ二つしたけど美佐保は無関心なり。彼は悠々と歌を唄つてゐる。一つのクライシス、善意よりの。面白し。これはルナアル風のモタイプになる。

八月三十一日(金) 晴 紙の見本

○山道の妻君、子供をつれてくる。子供奇麗に玩具をこわす。壺と静岡伊東のお茶をもらふ。

○ケフハイイ日ダツタ。

夜、父上来ラレル休養ノ為。富田来ル、白靴ガグツグツニナツテイル。表デ話ス。浴衣ニ羽織。美佐保、船のやうな白靴はいてゴソゴソする。

○月明星稀。

○目をふたしてたら時間が早くたつといふ公理を美佐保が発見する。公理と定理の区別をきく、「ナンデカテ」

妻は腹が不安だといって湯婆をあててねむつて了つた。(九時半)可愛い。目をしよぼしよぼさせてゐたのはやつぱりねむかつたのだ。自分は一人起きてゐる。何か書きたい興奮を感じる。父泊。

九月一日(土) 晴

父モ美佐保モ休養。

赤沢安子来ル。

風邪気味。

九月二日(日)

○九十といふ齡は深海の泥土の色彩を思はせる。

同日

父上美佐保臥床休養。

夜久しぶりで入浴。垢ぼろぼろ出る。

九月三日(月)

朝、父上帰らる。得生院貞室妙操大師の忌日。

美佐保庭に下りて花を剪る。ダリヤ、海老茶、クリーム、刈

萱、朝顔、アカシヤ、クワイ、山葡萄など。

チヨコレエト、花あられ、田舎饅頭を供へる。

夕景、王来る。助かる。美佐保、歌を唄ふ。

夜硝子戸にゴトゴトぶつかる物がある。検すると灯を頼つ

て持つ小鳥だ。磨硝子に下半身をかくして黒い木の実のやう

な腫をしてとまつてゐる。小鳥は部屋へ入つた。

頭を空気銃? にうたれてゐる。血が滲んでゐる。

仏壇の方へいつた。

とりをにがしてやつた。

九月四日(火)

新選宇野浩二集、小女画報(ミサホ)を買ふ。

江口隼人より文芸軌道の詩求め来る。

九月五日(水)

夜父上こられた。十時自動車でフトンと王をつんでかへら

れた。同じく今夜、猫を大山通へ移した。

入浴。湯ゆたか。美佐保初めて入浴。

梨と桃とを喫ふ。

一時臥床。

* 向日葵に朝顔の蔓がからみつ

いてしわつてゐる。

* 初秋の樹もれ日。

* 葡萄がアカシヤ一杯にはびこつて—青い—アカシヤは黄食

んでゐる。

* 瀬戸引の鍋をひつばつてあるくニワトリの話。

九月六日(木) 晴

一日美佐保ぐずらぐずらする。

* よくかわるものかな、下の家移転。こんどの奴は金ダラヒ

を叩くがごときやかましい奴也。

* アカシヤを切る。庭の整理少し。

* 夜大山通ヨリ使、猫「しう」は云云。



キュービー二つ美佐保に。余は美術全集巻18を王に買ひにやらせる。キュービー二つ三銭。

九月七日（金）晴

ロングハウスの一行お庭拝見に来る。

美佐保は矢張可愛い。矢張、彼は——これは顔をかくす

ときの手である。

弓場夫人黒い、病氣見舞。甘酒の罐四つをもらふ。

美佐保キュービーの着物を寢床の中で縫ふてやつてゐる。出来ましたよ。黒エリ。赤のしぼり。

上の兵頭さんからササゲと茄子をくれる。奥さんは病氣か云云との由。

王、上の山へいつて秋草をとつてきて瓶にさす。紫色の草花。

野生赤飯其他。

美佐保今日より服薬中止。夜齒いた。

千代紙とキュービー大を買ふ。美に。

無題

桐は^{かざりな}襖き徳を有つ。

お前の^{こゝろ}膚に粉薬の温さが匂ふ。

冬がくる。

九月八日（土）雨

朝今治水を買ふ。美佐保の齒痛~~~~~

夜父上来ラル。泊。蒲団でひとさわざあり。

九月九日（日）秋晴 秋風 北風一夜ニシテ到ル

アカシヤ漸粗。午後コレヲ伐ル。

父上ノウルネザメニ甘酒ヲ造ル。

午後、桐ノ木ノ徳ニ付イテノ詩ヲ作ル。

蒲団ヲ干ス。

隣人挨拶ニ来ル。彼ハシヤミセンヲ弾ク。小ウルサイ。

九月十日（月）晴

江口隼人ニ「運河にて」「桐畠で」の二篇を送る「文芸軌道」への原稿也。

パンテオン九月号来る。美佐保の旅行談をさく。

春山行夫より来状。又蚊帳をつる。

九月十一日（火）露白し。カンナの葉アカシヤの葉。

——の中に朝顔五つ六つ夕方まで全し。

俳句二つ三つ作る。秋の蠅。秋の蝶。

詩一篇をつくる。婦屋にて。この頃、にて、にてといふ題の

物ばかりできやがる。

美佐保にダリヤを持たせる。ダリヤを握つたまま、幼な子のやうにねむつてゐる。秋の蠅、口辺を去らず。終日頬べたの辺をいい匂がしてゐた。不思議な匂。

朝、散髪屋をよびにやる。来らず。仕方なしに顔を剃る。カ

ミソリの刃なくカンシヤクをおこして大きな声をたてた。「ナイカツ！」美佐保驚かしたのなら気の毒なことなり。ことのおこりは鏡を見てトロツケンとなりカンシヤクをおこす、あいそがつきる——自分乍ら。

不足の大根二つ買ふ。五銭。夜ソボロうまし。

トルストイ記事方々にでる。九月十日がトルストイ生誕百年祭也。図書館に展覧会あり。此頃全然門を出でず。悲壮な気がする。

病むひとの口辺去らずよ秋の蠅
ところかへてこぼれ牛乳吸ふ秋の蠅
秋の蝶木屑たたけば揚りけり
几辺より

灰皿

林檎二つ

新聞

壺二つ 蒙古刀

俳句集一冊

パンテオン二冊

鉛筆 煙脚入

銀鼠ビロードの帯締のサツク のみあましの茶碗

秋扇

インキつぼ

マツチ

ノート三つ

効果のない combination

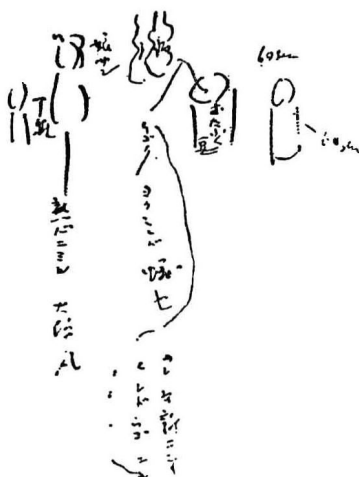
書く必要なかつた。

名優松助臨終の咳二つ。

ノートを二つおろす。一は句帳。一つ詩帖——これは美佐保に清書させる。

九月十二日（水）晴

夜十三日午前三時の夢の記。本屋の横丁。



落語的結末。便所ニオキル。

美佐保。央ば起。央ば臥る。

ある老人の係の絵

十二日の記念通信を夜かく。堺、桃山、神戸、安田、平田。

夜外へ出る。星を見る。



婦女界へ俳句。里の定紋提灯にある夜長かな

十一月廿一日（水）

ラジオ Joak 7.25 寛克彦博士、御大礼と神宮御祝詞の本質について。

（廿四日ラジオ版に依る追記。）

昭和四年（一九二九）

一月二十八日（月）

「軍艦茉莉」の原稿ヲ厚生閣ニ送ル。（二六五頁）

一月二十九日（火）

春山行夫ニ出状。

一月三十日（水）

協会へ「近事多少」を送る。（四枚）

城小碓ヨリ状。北川ヨリ状。

一月三十一日（木）

北川へ返事。葉山亨氏へ黄土の礼状。城へ「食卓」「夜」ヲ送ル。

二月十一日（月）雪

滝口武士（ハガキ）

北川冬彦（封書）

午後白羊の人二人、雑誌の件ニテ来ル。「戎克」ト改題ニ決メル。夕刻帰ル。

二月十二日（火）晴

詩神、甲虫、青樹、薺、ラ・クラルテ、群像、花畑、椎ノ木へ礼状。

産声に春まづ立つと知られけり

○貴志留吉氏へ幸子ノオ目出度ヲ祝フ状。

○小杉茂樹ヨリハガキ。返事。

○鈴木為二ヨリハガキ（詩ノ件）。返事ス。

○青樹、詩美、学来ル。

○仕事ナシ。

二月十三日（水）晴

北川へハガキニテ返事。滝口へハガキ。夜「冬」ヲ作ル、「戎克」ノ「夜」ト変更スルタメ城ニ送ル。

小林へ凸版ヲタノム

「回想ノセザンヌ」を買ふ。ミサホノ仕事。

○虚無と白鳥——「中庭」扉絵ノ如シ云々ノ礼状折戸氏へ。

○一九二八年ノ一部ノ礼状乾氏へ——フネクドオトノ必要。

二月十四日（木）晴

ミサホバセリ買ひに市場へ行ク次手に千曲川スケッチ（岩波文庫）ヲ買フテモラフ。田畔子供病氣、水枕ヲカリニクル、貸ス。「金十円ナイカ」「五十銭ヨリナシ」「ソシナラ俺の方ガ金持カ」「ソウイフ事ニナルネ」

